

よりあう

鈴木 元（日本中世文学）

連歌には独吟という特殊な形態もないではないが、まず基本的にはひとりでは始まらない。定められた時間に、一人またひとりと参集し、会の準備がととのう。そこに流れるのは、張りつめた空気であったか、あるいは和やかなざわめきか、はたまた祭りにも似た精神的な高揚か——。人がつどい寄りあう場という条件は、連歌という文芸の性格を強く規制していた。そこで今回は、連歌のために人々が寄り集う場、あるいは座をつつむ空気ということをめぐる、少しばかりお話をしてみたい。

*

坂流と称される医学を伝える京都の医僧で、坂十仏という人物がいた。彼が康永元（一三四二）年に伊勢参宮の記録として著した『伊勢太神宮参詣記』という本に、伊勢両宮法楽の連歌を催す記事がある。すなわち連歌をもって神への奉納しようとの企てである。所は宿所とした山田の三宝院。「当所の好士あまた尋来」て「あらまほしげに勧め」

たがためと、十仏はこの経緯を記す。この当時すでに、寺院や神社は連歌会の拠点となっていた。この三宝院にも、やはり愛好家が数多いたようだ。自身も「面目をうしなふ芸を忘れて」、ついつい「席につらな」ってしまいが、「着座十余人、笠着群集せり」と座の様子が描かれる。十人余りの連衆をとり巻き、人々が群集した様であろう。

ところで、この「笠着」とは何か。幸いこの参詣記には、江戸時代にはいつて度会常彰が注を施しているので、それを参照してみよう。

連歌ノ席ヲ開キテ、連衆ノ外誰ニテモ其席ニ立寄テ、笠ヲ着ナガラ句ヲツクルナリ。故ニ笠着ト云ナリ。今

モ北野ニ毎月廿五日ニ笠着ノ連句アリ。（『参詣記纂

註』）

どうやら正規のメンバー以外でも、ふらりと立ち寄り笠を着けたまま参入し、句を付けることが認められていたらしい。「笠着」とはこの飛び入りの参加者をさすと見てよい。そして注目すべきは、「北野」すなわち北野天満宮で「今モ」毎月行われていると記している点だ。常彰の注は正徳年間のもので、そうしてみると十八世紀の前半までは少なくともこのような形態の会が続いていたわけである。

参詣記には続けて、群衆の中に「花やかなる句なんど」を出す「垂髪」がいて、「満座の感歎」を誘ったと伝えている。

ご丁寧に垂髪の付けた句まで記されている。

わするなと書き置く文の一筆に

人の涙をおもひいでけり

十仏はこの垂髪に対し、「すみかはいづくなるらんと、ゆかしくおぼえしかども、心ざしをつけやりぬべき花鳥のつかひもなし」と、執着を隠さないけれども、「夜といふ文字を懐紙にとどむるばかりにて、ゆくへも知らずなりぬ」と、劇的にこの挿話を結んでいる。

煩わしいのは承知のうえで、ここには幾つか注を補っておかなければならない。まず垂髪というのは、有髪の童子をさす。おそらく美童であったのだろう。なにしろ、想いを伝えるべき「花鳥の使」もないなどと、わざわざ記しているのだから。さてこの「花鳥の使」、鎌倉時代の説話集『十訓抄』に「歌は妹背の中をも和らぐる媒なかつらなるによりて、色めくたくひ、これを花鳥の使とす」とあるごとく、恋情に色めくともがらにとつての、恋のなかだちを意味するものだ。どうやら、ここには稚児物語的な空気が匂わされている。

さて垂髪は、さような想いも知らぬ氣に、懐紙に「夜」の一字を残して行方知れずとなったという。「夜」の文字は、句の下の余白、連衆の名を記すべきところに、名前の代わりに記された一字であろう。笠着の興行形態において、外

からの参加者が被る笠には、様々な意味が込められている可能性もあるけれども、まずは素性を明かさず加わることに意義を認めていたことはまちがいない。してみれば、こうした仮の名が必要であったのも肯ける。ただ、「夜」というのは思わせぶりではあるけれども。

結局のところ笠着の連歌の資料が少ないだけに、これが一般的な普通の名乗りであったのかどうか、はつきりはない。そもそも、垂髪の美童が付句により喝采を浴び、名も知られぬまま行方知れずになるというのは、先にも稚児物語といった喩えを引いたが、いかにも説話的ではないか。しかも、参詣の記のしめくりの法楽の連歌の場として描かれた挿話という点を考慮に入れば、まさに出来すぎと言えよう。

だが間違つてはならないのは、こうした形式の連歌の会が存在していたことは、まぎれもない事実であり、すべてが創造の産物ではないということだ。時代は大きく下るが、安土桃山時代の肥後熊本の話として、次のような記事が伝えられているからである。

笠着といひて、かたはらの辻に夜に入て燈を立、一間程に幕を張て、其内に執筆一人居て、発句一句して出て吟ずるに、何者成とも望次第にあみ笠を着、顔をかしく行て出次第に付句仕候を、指合があれば則執筆返

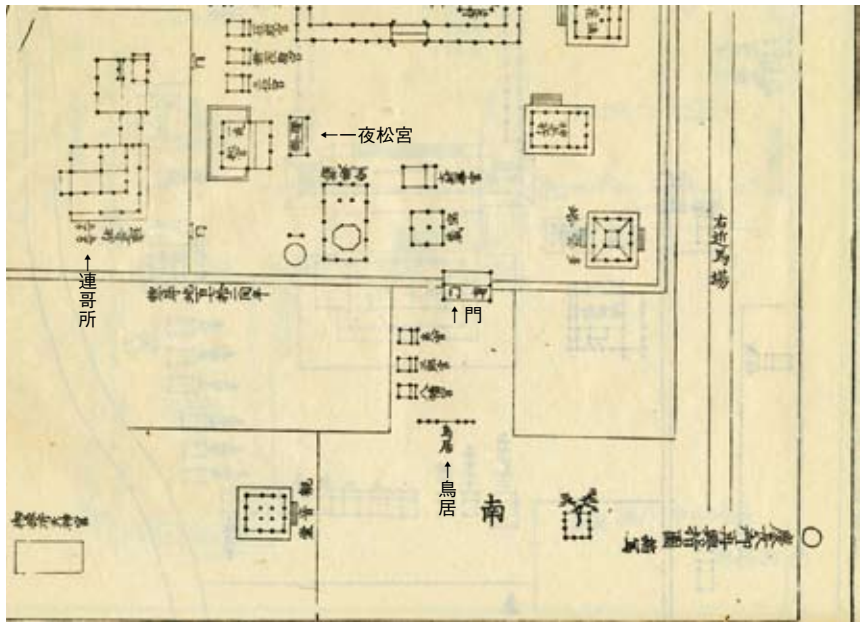
し、能^{よき}句なれば書とめて名をきけば、作り声にて色々
の作り名書付させて、一句なりとも二句成共、又は初
終まで成共人々の心次第に居て仕り、酉の刻の始め、
子丑刻時分には百韻出来いだしけり、七月八月時分は
大かた毎夜有たり
〔統撰清正記〕巻七

時代や場所の違いもあり、十仏の記録した「笠着連歌」と
まったく同じ形式であったとは言えないであろうが、「何
者とも望次第にあみ笠を着、顔をかくし行て」一座に参画
する張行形態は、脈々と続いてきた。そして、ここでも句
が採用されると執筆から名を訊ねられ、「作り声」で「い
ろいろの作り名」を名乗り、懐紙に書きつけさせると記さ
れている。声を「作り」名を「作」というのは、やはり
顔とともに、その素性を「かく」すことに意味があったも
のと思しい。

しかし、編み笠を被り、顔を隠した人々が群衆して、連
歌に参じるといふ光景は、少なくとも今日の眼からは異様
なものに映る。かような装い、ふるまいの意味について、
島津忠夫氏は「参詣人が遠い国々から旅をして来る神の服
装を装い、神の資格で付けたという意味をもつか」（『俳文
学大辞典』「笠着連歌」の項）との考えを示しておられる
が、こうした見解は、社会史研究の動向と呼応するもので

（例えば網野善彦『異形の王権』等）、民俗学のうえからも
興味深い資料を提供するものといえる。してみると、『伊
勢太神宮参詣記』の描く笠着連歌の末尾は、神を装った参
詣人ならぬ、まさに神そのものが垂髪の童子として来臨し、
一座をことほいだことを暗示した描写と読むべきかもしれ
ない。

神々の寄りつどう厳かな空間。いや、単に厳かなだけで
もない、かつて鎌倉中期から南北朝期にかけて流行した、
花^{はな}下連歌などは、社寺の境内の桜の名所に人々の参集す
る祝祭的空間でもあったろう。史料としての性格について
は検討を要するものだが、中世播磨の地誌資料として知ら
れる『峯相記』には、叢寺の由来に絡め、正和二年から文
保二年にかけて（一一三三～一一三八）の状況として、薬
師・観音の二像への信仰により、「二万部ノ経、九品念仏、
管絃、連歌、田楽、猿楽、呪師、クセ舞」に数百人が充満
して市をなし、程なく大堂が建立された経緯が語られてい
る。僧俗貴賤が相つどう、賑やかな雑沓。それは、「連歌」
の語を挟むようにして並んだことばから窺われるように、
宗教的、芸能的空間と一体のものであった。資料の性格か
ら、それを単純に史実とみなすことには慎重であるべきと
しても、連歌を取り巻く環境として、その記述を疑うには
足らない。また事実、そうした中で連歌は成長してきた。



(図2) 『北野藁草』所引「慶長御再興指図」

に収められた「慶長御再興指図」に、鳥居をくぐり南の御門を過ぎて左手、一夜松宮のその裏手に「連哥所」が確かに見える。まさに「内」の会所であろう(図2)。

連歌の張行の場における「秩序」の問題、それは鎌倉末

から南北朝期にかけての、世相の反映そのものであった。いまさら取り上げるには及ばぬ話題ではあるが、かの名高い『建武式目』の一条にも、「群飲佚遊を制せらるべき事」として「或は茶寄合と号し、或は連歌会と称して、莫太の賭に及ぶ」とあった。そこには、賭博というもうひとつの危うい要素も絡んでくるが、何より「群飲佚遊」と云われるように、群れつどい無秩序に繰り広げられる遊興こそが、危険視の対象であったのだろう。ここに「茶寄合」が並び制せられる通り、連歌と茶は当時の佚遊の筆頭であった。そして秩序を脅かす「寄合」の代名詞でもあったのだ。

これもしばしば引き合いに出される挿話だが、鎌倉末期の動乱を描く『太平記』は、千劍破城に立て籠もる楠正成を兵糧攻めにしようとした幕府軍が、退屈に耐えかねて花の下の連歌師を呼びくだし、一万句の連歌を始めたこと記している。退廃した幕府軍の有様を象徴するように、戦場における暇つぶしの遊興の数々、碁・双六とならべて、「百服茶」がもてあそばれたと描いている(巻七「千劍破城軍事」)。あるいはまた巻三十では、足利尊氏・直義兄弟の争いに乗じて南朝方が都を奪還し、北朝の帝・上皇が吉野の奥の賀名生あなうに移されてしまう一件を描き、後伏見院の子にして天台座主を四度まで勤めた梶井宮尊胤法親王の話題に及ぶ。この尊胤、「門跡の富貴」を背景に、「獅子・田楽を

召され、日夜に舞ひ歌はせ、茶飲み、連歌師を集めて、朝夕遊び興ぜさせたまひしかば、世のそしり山門の訴へは止む時な」い様であったが、南朝の侵攻により金剛山の麓「配所のごとくなる御住居」で零落を嘆くところで巻を終える。

世の動乱を嘆く尊胤の姿は哀れを誘うように描かれてはいるが、しかし、同時に『太平記』の筆致は「世のそしり」を見過ごしてはいない。事実、彼の連歌狂いは相当なものだったようで、連歌の最中という理由で、祇園社の社僧の訴えが取り次いでもらえないということもあつたらしい（『祇園執行日記』）。尊胤については他にも、地下^{じげ}連歌師の連歌論書『梵灯庵返答書』からこんな風聞が、金子金治郎氏により紹介されている。

梶井二品親王御数寄の比をひ、佐々木の道誉禅門、常に参候ありき。順覚・信昭・救済など肩をならべてつかふまつりし比、昼夜御会ありけるとなん。

それは花の下とは違つた場であろうが、武家（道誉）と地下（順覚等）を交えた社会的な意味での「開放された会席」（金子氏『菟玖波集の研究』）であつた。それが、また同時に茶飲みをも招き寄せる群飲佚遊の空間でもあつた。無論、ここでいう茶とは、その産地を聞き分ける鬪茶の遊びであり、後代の侘び茶とは違う。

上下を問わず寄り合い遊興にふける空間、それは何も寺

社境内の桜の花の下との限定なく、いつでもでも生起しえたであろう。おそらく幕府が群飲佚遊を誡めるのと呼応するように、寺社側が域内で衆庶入り乱れる連歌の興行形態を閉め出していった、という事情ではなからうか。とはいえ、それだけで十分な説明になつていとは思われない。花下連歌のエネルギーは、有名寺社の境内を閉め出された程度で、衰退していく類のものであつたのだろうか。なお、疑問は残るのだが、寄り合いの文芸たる連歌の行方を語るためには、その問題はひとまず措いて、少し視点を変えてみる必要がある。

*

室町中期に活躍し、連歌の世界に、精神的な美意識を確立したとして高く評価される連歌師心敬。彼の教えを兼載が書き留めたという『心敬法印庭訓』には、会席の心得として次のように記されている。

連歌に雑談し居眠りなどする者は、その身は沙汰のかりにて候。一人なれども交り候へば、みなのおたになるなり。ゆめゆめ交ぜ候まじきにて候。：さやうに雑談などする者は、げにも戯言^{なまこと}のやうなる事をのみし候て、善悪の分別の候はばこそ。返す返すあたりにも寄すまじきにて候。しみこほり神も仏も影向なりつべう澄み渡り、ときどき香の匂ひ空薫物などこそおもし

ろくは候へ。

まずは雑談、居眠りの禁止。さような輩は「沙汰限法度の外也」(『和漢通用集』)、まさに論外といふべき存在だとされる。しかも「皆のあた(仇)」になるから、「あたりにも寄すまじき」とまで云われるのだから尋常ではない。このような発想は、かつての花下連歌や笠着連歌、あるいは茶寄合とともに併称された、例の佚遊の連歌とは無縁の世界であろう。しかし、こうした会席もまた、寄り合いの場であることに変わりはない。ただ、そこは異質なものを寄せ付けず、「しみ凍」るまでに「澄み渡」った精神の凝縮が要求される空間となっていた。そこで一味同心ともいふべく、心を寄せ合い専心することでこそ、「神も仏も影向」するのだという。

だが、信仰を基盤として衆人が集うという点では、花下連歌にあつても同じことであつたと思われる。連歌の好仕たちが集う桜の花の下、それは神の影向するしだけ桜であることに意味があつたとする、岡見正雄氏の所説(「もの―出物・物着・花の本連歌―」)を忘れてはならない。ただ、ともに神の降臨を期待しながらも、精神のありようは大きく違っている。このような意識の変遷の拠つてきたところについて考えてみるのも面白そうだが、ここで述べておきたいのは、連歌とならび享乐的寄合の象徴と

も見なされた茶も、次第に静謐な空間をもとめて沈潜していくようになる点である。否、実は茶だけではない。これは中世芸能全般にかかわる大きな潮流でもあつた。

たとえば心敬の庭訓を紹介したつながりから、まず香についてふれておこう。心敬が連歌の会席の心得を説きながら、澄み渡つた精神、座の空気をこいねがうべきことにふれ、そこで「香」「空薫物」に及ぶ意図、それは右の記述だけからは、必ずしもはっきりとしないのだが、当時、連歌の席に花瓶や香炉を備えるようになっていたことと、やはり関係していよう(貴顕の会席としては『看聞日記』応永廿六年六月十五日条、地下連歌師などもまじえた席としては、時代がやや下るが大英博物館蔵『猿の草子』の絵が参考となる)。兼載にも、「空だきといふは、いづくともなく匂ひたるやうなり」(『兼載雑談』)との発言があるが、おそらくはこれも連歌会席にかかわつての言及であつただろう。『若草記』という連歌作法書でも、「会席の様はいかに構へ、いかにあるがよろしき物にや」との問いに答え、「名香の匂ひ空薫物など、心にくく燻り出たるに、発句よき程に読進し、静まりはてたる、殊勝也」と語っているからである。

また同時に、神の影向は異香をとまなうものとの発想が、その記述には結びついているのかもしれない。永享六

(一四三四)年ごろの成立とされる『染田天神縁起』には、天神の靈威のあらたかなることを示すものとして、「毎度の千句の中に於て、異香、度々に及ぶの間、御影向、甚だ疑ひ無し」と記している。神の影向が異香を伴うものであるとするならば、「いづくともなく匂ひたるやう」にくゆらせた香は、連衆に確かな神の存在を感じさせたはずだ。

元來、香は宗教儀礼の具として広まったものであることからすれば、神の影向と結びつくのも至極当然のこと。その後さまざま改良の手が加えられ、貴族社会の必需品となつてゆくことは周知のとおり。さて、そのような歴史の長い香の文化の中で、ここでも注目すべきは、『太平記』の描く時代相の中の「香」の在り方である。貞治五(一二三六)年、管領の斯波道朝と対立した佐々木道誉は、わざと道朝の設定した將軍邸の花の下の遊覧の会にぶつけ、洛中の芸能者をあまた引き連れ、いかにも道誉らしい華美な大遊宴を大原野で催す。『太平記』は筆を尽くしてその様を描くが、多くを引用するわけにはいかない。

本堂の庭に十圍の花木四本あり。この下に一丈余りの鍬石の花瓶を鑄懸けて、一双の花に作り成し、そのあはひに兩圍の香炉を兩の机に並べて、一斤の名香を一度にたき上げたれば、香風四方に散じて、人皆浮香世界の中に在るがごとし。(卷三十九「道誉大原野花会

事)

桜の大木の根本に真鍮の花瓶を据えることで、桜樹をそのまま生けた花と見立て、その間に大香炉二つを机に並べ、名香一斤を一度に焚いたという。スケールの大きな座敷飾りの趣向であろう。右のごとき贅沢な舞台設定を用意して、百服の茶の遊びが行われたという。連歌の話題こそないけれども、無論おなじ席で連歌が行われていたとしても不思議ではない。それは茶・花・香の遊びであり、まさに二条河原落書に「此比都ニハヤル物」として「京童ノ口スサミ」となった「茶香十炷しよノ寄合」の特異な一形態であつただろう。

道誉の並はずれた華美な遊びは例外としても、茶や連歌とともに賭博的な性格をも有した遊興性の強い寄り合いというのが、その時代の香の楽しみ方であつた。その後、香の遊びは歌合に倣う優雅な薫物合たきものあわせや組香くみこうという形式に落ち着いていき、一方では花とともに、座敷飾りとして会席の空間に収束していく。香がくゆり花の立てられた座敷は、また茶事の舞台ともなる。そこで注意したいのは、「花にとつて会所〓座敷飾りがその後における展開の原基となつたと同様に、茶湯においてもここでの茶が基本となつた」(村井康彦「茶・花・香の系譜」といわれるように、「会所〓座敷」という空間を軸にして、室町前期のあたりでこ

れら「寄合の芸能」が、そろって重要な転機を迎える事実である。そして連歌も基本的には、このような会席の文芸として様式化され、作法も整備されていき、限られた人数で心を合わせることを目指すようになっていくのである。

連歌における芸能性の問題、あるいは「芸能としての連歌」の問題に、はじめて本格的にメスを入れられたのは、島津忠夫氏であった（『著作集第二巻』）。確かに、連歌は能や舞曲などとは違い、どこに「芸能」性を認めるのかについて、一般的な共通理解ができ上がっているわけではない。そもそも芸能と見てよいのか、との反論も予想される。だが、芸能の要諦を演者と観客（鑑賞者）の存在と、一回性（当座性）の介在に見てよいとするならば、連歌は疑いようもなく芸能としての一面を備えていた。とかく誤りやすいのは、連歌がいわば「実演」された後、記し留められた作品を、その場に参加しなかった者が後から鑑賞するようになる、そうした後出の享受形態（まさに文学的鑑賞）を、第一義的なものと理解しがちなところである。

芸能性を無用のものとして、純粹に表現の錬磨に努めるのであるならば、なにも連衆が一同に会し、時間その他の制約の多い中で句をひねる必要などないことだ。確かに、連歌の論書・作法書が続々と生み出される中で、表現の洗練は連歌作者たちの重要な課題になっていくのだけれど

も、それでも、一座張行という形態を変えるべきだとの議論が出来ることはなかった。やはり連衆が寄り合うところ、大きな意義があったことは疑いようもなく、そこに、茶の湯や香などと足並みを揃えた、連歌の歩みがあったのだと思う。

ところで、ここまでふれてこなかった話題に、連歌用語としての「寄合」の問題がある。『宗長連歌自註』は、その冒頭近くの部分で、次のように云う。

あるひは本歌の心を取り、詞をよせ、あるひは本説・本文、和漢に其よせ有ことをいひ出ば、それにしたがふを連歌の寄合とやいふべからん。

句を付けるにあたり、「あるひは本歌」あるいは「和漢」の「本説」（ひとまず、故事・説話・物語・漢詩等の類と考えていただければよろしい）に、「よせ」のあること、それが「連歌の寄合」だという説明である。これは、連歌の「寄合」の起源を、和歌の本歌取りにおける「よせ」の技法にもとめる、金子氏の説を思い起こさせる。ちなみに、和歌での「よせ」とは、縁語を歌の上下の句に配すること。翻って宗長の自註での用法は、「縁」ほどの意味と考えればよい。引用部に続けて宗長は、前句に寄合で付けられそうな気配があれば、付句ではそれとはっきりわかる表現を用い、前句に鍵となる語が多くある場合、付句では本歌・

本説の「面影」のみを漂わせればよいと説く。はてには、付句の心得を「いづれの事も前句によび出さるるやうにぞ有べき」と諭えている。そうした言い回しの中に、連歌の会に「よび出さ」れ、連歌仲間の縁にひかれ、いそいそと集う好士を重ねて見たくなるのは、私だけか。

連歌の座を共有するという「縁」にひかれて、寄り合う連衆。そこにより強い縁、より緊密な一体感を求めるようになつていくのも、中世的「よりあい」の姿であろう。だが一方で、精神的紐帯などとは無縁な「烏合の衆」とも置き換えうる「寄合勢」^{よりあひせい}なる語も同じ時代に存していた。してみると、連歌はいずれの意味においても「よりあい」の文芸であった。

参考文献

- 増補大神宮叢書12『神宮参拜記大成』（吉川弘文館）、新編日本古典文学全集『十訓抄』（小学館）、武藤巖男他編『肥後文献叢書第二卷』（隆文館）、『続選清正記』収録、『続群書類従』第二十八輯上（続群書類従完成会）、『峯相記』収録、『伊地知鐵男著作集Ⅱ』（汲古書院）、新潮日本古典集成『太平記』、中世の文学『連歌論集三』（三弥井書店）、『心敬法印庭訓』収録、岡見正雄『室町文学の世界 面白の花の都や』（岩波書店）、山内洋一郎『染田天神連歌研究と資料』（和泉書院）、『島津忠夫著作集第二卷』連歌（和泉書院）、『歌論歌学集成 第十二卷』（三弥井書店）、『兼載雑談』収録、中世の文学『連歌論集四』（三弥井書店）、『若草記』収録、藝能史研究会編『日本の古典芸能5 茶・花・香』（平凡社）、村井論文収録、『桂宮本叢書第十八卷連歌一』（養徳社、『宗長連歌自註』収録）